

名著ふたたび

混迷の時代だからこそ

朝日

2017.11.3
朝日新聞

文化の日。深まる秋の一日、時間を見つけ、スマホを脇に置いて、本の世界にゆっくり浸ってみてはどうだろう。

近年、古典や名著と呼ばれる作品が、装いを一新して再登場している。思い切った現代語訳に人気作家が個性を競う新訳、カバーや字体の変更。古くさくて読みにくいという印象をぬぐい、新しい読者に届けようという試みが広がり、ずいぶん手に取りやすくなっている。

中でも一番の話題は、岩波書店の雑誌「世界」の初代編集長だった吉野源三郎がのこした「君たちはどう生きるか」だ。初版は日中戦争が始まった1937年。コペルニクスにちなんで「コペル君」と呼ばれる中学生が、自己と社会の関わりをみつめていく岩波文庫のロングセラーを、若者の流行をリードしてきた出版社マガジンハウス

が漫画化した。発行部数は2カ月余で43万部に達する。

「原作には、いじめや貧困など、現代にも通じる問題が描かれている。それらにどう向き合いかをまじめに考えてみたい、という時代の機運を感じる」と担当者話す。

読み継がれてきた作品は、をとらえて離さない面白さに富み、読み直しに堪える奥行きをもつ。人間の可能性も、卑小さも浮き彫りにして、生きる手がかりを提示する。そんな本が待たれていることを、名著の復活は教えているのではないか。

気になるのは、こうした読者の期待を出版界全体がどれだけ真摯に受け止めているか、だ。

年8万点近い新刊の7割が、翌年には店頭から消える。現場からは、二匹目のドジョウを狙った企画の多さを嘆き、時間を

かけた仕事ができなくなっているのを憂える声が聞こえる。

書籍と雑誌の推定販売総額は約20年で4割以上落ち込んだ。

「公共図書館は文庫本を貸し出さないでほしい」。図書館関係者が集まる会合での文芸春秋社長の発言は、出版事情の厳しさを物語るとともに、文化の担い手の責務とは何か、人びとの間に論議を巻き起こした。

苦しい台所でも、志をもって地道な努力を続けている出版社は少なくない。利益をあげる大切さは言うまでもないが、目先の利益を追うだけでは、出版文化はますますやせ細る。

なぜいま、古典や名著が呼び戻され、読者にひとときの幸福をもたらしているのか。その意義を出版関係者はもちろん、社会全体で考え、受け継いだこの財産をさらに豊かにして、次代にしっかり手渡したい。